

義に飢え渴く者の幸い

主イエスの「山上の説教」の冒頭にある「八福のメッセージ」において、心の貧しさ、悲しみ、柔和と並んで、主が語られた神の民のこの世における特性の第4は「義に飢え渴く」ということである。「義に飢え渴く人々は幸いである。その人たちは満たされる」(5:6)。

これまで学んだ八福のメッセージには思想の発展が見られる。キリスト者は、まず自分の心の貧しさ、即ち神の前に己れの無力さ、貧しさ、罪深さを悟り(3節)、第2に、それを深く悲しみ(4節)、第3に、身を徹底的に低くして神に来る柔和な人であり(5節)、そして、そのように砕かれた魂はいつも熱心に神の義を求め、神のみ心にかなる者になろうと切望して生きる(6節)。そのキリスト者の願望を、主イエスは「飢え渴く」という言葉で表現された。そこには、信仰と生活において、神のみ心にかなる正しさと清さを熱心に求めて生きようとするキリスト者の姿がよく表されている。

ここで「飢え」「渴き」とは、バークレーがいみじくも指摘するように、「朝食と昼食の間の軽なお茶菓子で満足するような、ちょっとした口ざみしさ」ではない。また「一杯のコーヒーや冷たい飲み物でいやされるもの」でもない。ここでいう飢えとは「餓死しつつある者が食物を求める姿」であり渴きとは「水を飲まなければ死んでしまう状態」の渴きのことである(マタイ4:2、詩編107:5)。

飢えた者がこのように強烈に食物を求め、渴いている者がこのように切実に水を慕い求めるように、そのように、信仰と生活において神の御心にかなるようになることを切なる願いとして生きる、神と神の義を求めて熱心に生きる、そのような者の受ける幸いを、このことばは私たちに教えている。私たちは日々、そのように、神の前に生きているであろうか。この言葉は、私たちのキリスト者としての生き方に対するチャレンジの言葉でもある。

詩編第42編の言葉を思い出す。困難なただ中であって、詩編の記者は次のように歌い、神を慕い求めるその魂の叫びを記している。すなわち、ひからびた荒野の中、涸れた谷に水をあえぎ求める鹿のように、神よ、私の魂はあなたを切に求める。神に、我が命の神に、私の魂は渴く。いつ私は神の御前に出て、その御顔を仰ぐことができるであろうか!と(詩編42:1~2)

私たちの飢えた魂をあかせ、渴いた魂をうるおすお方は誰か。それはキリスト以外にない。サマリアの女の感動的な物語を思い出す。過去の罪を負い幸せを求めながらも現実の罪に打ちひしがれて孤独と絶望の中を生きるサマリアの女に、主はあえて近づいて行かれて、彼女の心の根底にある渴きを癒され、命へと導かれた(ヨハネ第4章)。

またエルサレムの神殿に群がる群衆に向かって主は声を張り上げて「渴いている者はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」と言われてご自身のもとに人々を招かれた(ヨハネ7:37)。十字架において私たちの罪を贖なわれ神の前に義として受け入れて下さった主イエスこそ、心の飢えを満たし、魂の渴きを潤す救い主なのである。